

多民族国家マレーシア

— マレーシア（多民族国家）の教育制度への一考察 —

前ペナン日本人学校 教諭

兵庫県尼崎市立大庄北中学校 教諭 阪 本 一 郎

キーワード：現地理解，教育制度，インター校

1. はじめに（マレーシアと日本人学校の概況）

マレーシアにはクアラルンプール，ジョホールバル，コタキナバル，ペナンと日本人学校が4校ある。クアラルンプールは千人を超える大規模校であるが，他4校は中規模或いは小規模校である。ペナン日本人学校は小中学校併設で140名余りの児童生徒数であり，中学部で約40名余りで各学年1クラスずつである。規模的には最適で個々の生徒に良く目が行き渡り一人ひとりに丁寧な指導ができたといえる。

ペナンはマレーシア第2の商業都市でクアラルンプールに次ぐ規模を誇る。日本人学校に所属する児童生徒の多くは，電子部品類の製造関係会社に勤務する保護者の子どもたちである。職人気質の保護者の方が多く，いつも温かく学校を見守ってくれる保護者の方々は協力的で良い教育環境であった。

ペナンの人口は増加し続け，現在約70万人程度，マレー系，中国系，インド系，他入り交じる多民族都市である。このペナンに約1500人の日本人が住んでいる。とても住みやすい環境ということもあり，退職後のロングステイ（MM2H）のご夫婦もたくさん住んでいる。治安面や物価，食べ物，親日感など，どれをとっても日本企業が進出する上で好条件がそろっている。また，マレーシア政府による企業誘致政策，安価で優秀な労働力も日本企業にとっては魅力的といえる。また，マレーシア政府が推し進めるルックイースト政策により経済は急成長し日本のバブルの時代をしのばせるようである。

赤道直下のマレーシア，ペナンは太陽の光と緑に囲まれ，少し街路に出ると道行くいろいろな民族衣装，文化，風習，多言語に触れることができる。このおおらかなペナンで大人も児童生徒たちも日本では感じることでできない異文化，多文化を満喫する日々であった。

※MM2H（マレーシア マイ セカンドホーム。政府が推進する仮移住プログラム）

2. マレーシアの教育について

(1) 教育現状

多民族国家マレーシアでは，マレー人，中国人，インド人，その他の民族が1つの国にマレーシア国籍を持つ者として住んでいる。公用語はマレー語ではあるが，各民族の人たちも複数の言語を習得し話すことができる。1人のマレー人がマレー語，英語，マンダリン，広東語をしゃべることができるという状態はここマレーシアでは珍しいこととは言えない。インド系においてはマレー語，英語にタミール語をしゃべる人もいる。島国日本で生まれ育った私などには羨ましい限りである。

各民族の文化習慣を大切にしながらも生活する上で欠かせない言語能力は生育過程で富裕層は意図的に習得させ，そうでない人たちも生活の中で身につけている。表向きには世界の中でも類を見ないほど民族融和が進んだ国と言われるが一概に内情はそうとも言えない。本来ネイティブであるマレー人は全ての面で中国系マレーシア人に圧倒されている。インド系においては尚更な状況である。そこで，政府はマレー人優遇政策（プミプトラ政策）を実施している。マレー人全てに公的扶助をあらゆる方法を使って実施するというものである。一見国民全体に認められている制度のように見られるが，それは一部の富裕層のみで，中国系やインド系の中間層以下ではかなりの不満が

降り積もっている状態である。

そこでマレーシア政府は、教育制度に注目することとなる。これらは同じ多民族国家でマレーシアから分離独立したシンガポールも同じような制度を採用しているが、その制度とは教育の機会は全国民に保障する。しかし児童生徒の学力の格差によりその都度、進路を振り分けていくというものである。

次の項に詳細を揚げているが、マレーシアでは小、中、高校の各端境期に全国統一の学力検査を3回実施し、その結果により進路を振り分けていくのである。これらの制度によって優秀な人材を公平に養成確保していくというものである。公平とは言っても表向きだけで、財力のある富裕層が普通の塾通いなどで有利に進むことは言うまでもない。また、ここでもブミプトラ政策が適用され、国立大学においてはマレー人が最優先に合格確保される。一瞥すると、公平に全国民に機会を与えその中から優秀なものだけを確保（選別）する。公平な実力主義のように見えるがそうではない。大部分のマレー人は、ある程度全国統一試験に合格すれば費用が格段に安い国立大学へと進学する。一方、財力と学力に長ける一部の中国人たちは、海外（主に豪州やイギリスなど）の大学へ進学する。中低所得層の中国人やマレー人、インド系は大部分が高等教育終了後、就職するというのがマレーシアのパターンとなっている。

貧富の差を野放しにしていると国民の不満は高まる。そこで上記のように教育の公平をうたうようにして「できないのはあなたの責任ですよ」言い訳をしているように見える。しかし財力のある者とブミプトラ政策の恩恵を享受できる者だけが良い進路を獲得できるのである。マレー人は費用も余りかからない公立の一般校へ進学し、財力のある者たちは学力の高い公立や私立の名門校へ進学し進路が保障される。また、次の項からも分かるように、インターナショナル校へ進学する者もかなり多い。マレーシアのデュプロマではなく、世界共通のデュプロマ（IGCSEやIBバカロレア）を取得し海外へ進学する若者も多い。その点から考えてもマレーシアでは公立校をあざ笑うかのようにインターナショナル校が多く点在している。学費も高い故、通学できる生徒は限られてくる。あらゆる面での貧富の差が大きいマレーシアであるが（日本に比べて）このような状況が続く中でも余り大きく民衆の不満が爆発することはない。ルックイースト政策を掲げるマレーシアでは2020年に先進国入りを目指して活気に満ちている。豊富な地下資源、豊富な労働力、35歳以下の人口が全人口の半分以上であるというこれからの国である。これらの条件に国を挙げての外国企業誘致が功を奏して日本を始め海外の大企業が軒を連ねて進出している。日本の高度経済成長とバブル経済をあわせたような賑わいである。しかし、これからの政策はもう一つ先を読み現在迫られている日本の負の遺産を後追いをすることがないよう、いずれやってくる高齢化社会や迫られる産業構造の転換など、表面だけのルックイーストではなくより先を深く見つめるものでなくてはならない。現在のマレーシアの現状と今後の行方を見極める上で学校制度とインターナショナル校を調べる意義はきわめて大きいと言える。

(2) マレーシアの教育制度

マレーシアの小学校は、1年から6年まで。7歳より入学し、日本と同じく義務教育である。しかし日本と異なる点は小学6年時に児童全員が全国統一テスト「UPSR」を受験し、その結果により各レベルの中学校へ振り分けられるということである。マレーシア人にとって人生最初のふるいかけられることになる。ちなみに私が住んでいたペナンでは鍾霊^{ちようりんちゆうがく}中学がトップクラスの中学校である。また、中学校はForm 1～Form 6までの6年間ある。（中高一貫で高校という名称がない）

次のマレーシア人にとっての難関はForm 3のときに、「PMR」という全国統一テストを受験し、その結果により理系、文系、就職など各生徒を振り分ける。残り2年間の中学校生活の内容が決定されると考えて良い。そういう意味からもPMRは各生徒の人生に大きなウェイトを占めている。また、注目すべき点は、小学校ではマレー語を始め、中国語、タミール語、英語での各民族による教育が許されているが、中学では全てマレー語の授業となる。よって小6時の「UPSR」でマレー語が習得できていないと判断された場合は、1年間の予備課程に進まなくてはならな

い。

次に最後の難関Form 5年時で「SPM」という全国統一テストを全生徒が受験する。その結果により私立のカレッジへ進学する者もいれば、成績優秀者の一部は(A-LEVEL)というクラスに入り、1年間外国語などの学習をして海外へ留学する者もいる。また、SPMの成績がふるわないものはほとんどが卒業し就職する。基本的にForm 5で修学年限は終わりになり、SPMの成績優秀者の中にはForm 6へ進み、そこで1年ないしは2年間学習をすることになる。成績優秀者クラス(UPPER 6)(反対はLOWER 6)の生徒の大部分は日本を始め欧米やオセアニアの大学へ進学する。また、国の奨学金により優秀者への学費負担はかなり軽減される。その他、Form 6では、卒業試験(STPM)があり、成績優秀者は優先的に国内の国立大学へ進学できる。マレー人はブミプトラ政策により優先的に入学できるが、他民族の場合は、海外の大学に比べ国内国立大学の方が難関である。鍾霊中学の場合、国内への大学、カレッジ(私立大学)への進学が約85%で海外への進学が約15%である。(海外は、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、アメリカ、シンガポールなど)

マレーシア国内に大学(ユニバーシティ)は公立私立合わせて10校程しかない。またカレッジは国内に数百校ある。ユニバーシティとカレッジについての違いは、学位が授与されるかどうかの違いで、就職に関しては余り大きな差は持たない。前述したが国立大学に関してはブミプトラ政策が用いられ、マレー人が優先的に就学できる。その定員に占めるパーセンテージについては発表されず、マレー系以外の民族の不満のひとつとなっている。

ちなみに教員についてであるが、教員養成大学を卒業した後、教育省の名簿に登載を希望すれば教員になれる。どこの学校に配属されるかは分からない。また、他大学を卒業後に教員を希望する場合は、タンジュンマリムにある教育専門学校で9ヶ月間学習の上単位を修め、免許を取得すれば教員になれる。

多民族国家マレーシアの公教育では、小学校では各民族教育、中学校ではマレー語によるナショナリズムを重視する教育と変化する。(独立華文型学校などのごくわずかな例外もある。これは裕福な華人たちが私費を出し合ってつくった学校で民族教育を施している。)また、大学への進学ではブミプトラ政策が大きく影響している。この点では、経済的マイノリティであるマレー人を優遇しているのであるが、言語の問題(英語や中国語の方が利便性が高い)、競争率の低下などマレーシア経済の大きな足かせになっていることは否めない事実である。小学校時より数々の全国統一テストで優秀な人物を振り分けながらも、マレー人優遇政策によりそれ以外の民族はその恩恵をあまり享受できていない。また、私立の大学やカレッジにはかなりの高額な費用がかかる。よほどの優秀な成績を修めない限りは、マレー系以外の民族の自ら希望する進学は難しいといえる。これから、マレーシアが経済面で民主的に成長し続けるためには再度学校制度からの見直しが必要となろう。35歳以下の人口比率が50%以上の若い国マレーシアだけに、教育へは国庫歳入の20%以上を費やしている。しかし、思うように結果が得られていない事実を再考すべきであろう。

(3) マレーシアのインターナショナル校

日本とはちがいマレーシアではロカール校のみならずインターナショナル校も数多く存在する。インター校の特性についてペナン州にある伝統校ペナンインターナショナルスクール(通称アップランズ校)について在任中に参観し調べた内容を簡単に述べたい。

アップランズの就学段階別対象年齢は Primary (Year 1 to 6) 幼稚園～小学校高学年, 5～11歳 Secondary (Year 7 to 9) 小学校高学年～中学, 11～13歳, Upper Secondary (Year 10, 11) 中学, 14～15歳 IB Diploma (Year 12, 13) 中学～高等学校(含むIBコース), 16～19歳となっている。

アップランズ校のシラバスによると全教科に共通している点として知識習得は勿論だが、それぞれの事象をクリティカルに考えることのできる力、そしてそれをバランスよく分析する力の習得に力を入れている。テストにおいても暗記問題ではなくその事象から何を学ぶことができるかを自ら考えさせるような問題の出題が多い。

最後に、アップランズ校がペナンーの人気校であり、難関である理由となるIGSCE（イギリスの大学へ進学するための統一基準試験）とIBデュプロマについて説明し、卒業生の進路先を提示して終わりにしたい。

アップランズ校では生徒たちはY11の終わりにケンブリッジのIGSCEの試験がありY12とY13の2年ではIB（国際バカロレア）のディプロマのプログラムを適用している。（Y13の5月に本試験がある。）IBのプログラムに進むにはIGSCE（Oレベル）の試験に合格することが必須で（C以上）、もしそれにはかなわない生徒たちはペナン、またはシンガポールのカレッジなどでIGSCE（Oレベル）の延長であるAレベルを勉強したりする。IGSCEの資格の利点はイギリス系の大学などに進学する場合とても有利であること、IBの場合はそれが国際的にも認められている資格であるため各国で適用されるのが利点である。成績の良い生徒はこの試験の結果でクレジット（単位）が認定され、ある科目を免除されることやスカラシップを受けることができる可能性もある。

最近では日本でも受け入れる大学が増え、高校でもIBプログラムを導入しようと考えている学校もある。国際バカロレア資格については最近では日本でもかなり知られるようになったのでインターネットなどで日本語の説明をみつけることができる。IBの魅力的な点は、ディプロマをとった生徒自身が、学びの重要性を自分で認められるということにある。もともとが生涯学習のための勉強ということで、IBによって勉強以外の様々な事を学ぶので、生徒から終了時に、誇りを持って「やって良かった」という意見を良く聞くそうだ。いわば「学び方を学んだ」といった方がいいかもしれない。依存心も少なく、自律的に学ぶことを楽しむ生徒が多いようだ。

進路については様々で、インターナショナルスクールということで各国から生徒が集まっていることもあり、生徒たちはアメリカ・イギリス・シンガポール・オーストラリアなど様々な大学に進学する。マレーシア国籍の生徒たちはマレーシア国内大学に進学することは少なく、アメリカ・イギリス・オーストラリアなどの大学に留学する。欧米系の学生は大体自国の教育機関に進学することを望むことが多い。日本人としてはなかなか理解しがたいところもあるが、このように多民族国家マレーシアでは、進学においても多様性がある。世界各国で通用する進学資格を得るために、自分の目的に合わせた取得可能な資格のあるインター校へ進学する生徒も少なくない。